

# 西照

西照寺寺報「さいしょう」

第30号

2012年10月27日

発行 浄土真宗本願寺派 西照寺  
高岡市吉久2丁目4-40

西照寺ホームページ <http://nisitera.eek.jp>

## 報恩講 勤修

左記のとおり今年度の報恩講お勤めいたします。  
お参りくださいませ。

### おつとめの時間

十一月十四日(水) 午後二時(速夜)〜

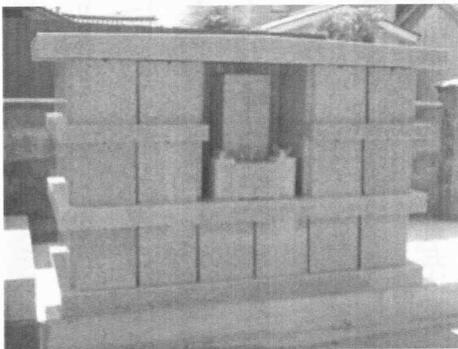
午後七時(初夜)〜

十五日(木) 午前九時半(満日中)〜

布教使 林 史樹 師(高岡市伏木 要願寺住職)

※お齋(御膳)は、十四日速夜のみで、十五日はありません。

## 西谷山西照寺



### 西照寺個室型合同墓

従来の集合型合同墓のほかに、骨壺2体収納可能な個室型合同墓が完成しました。個室ですので蓋に家紋や家名を刻むことができます。

第2次として、骨壺6体収納可能な個室型合同墓が今年度中に完成の予定です。

詳しくは、西照寺 HP をご参照いただくか、西照寺(84-0705)までお問い合わせください。

## 正信偈のはなし 第七話

成等覚 証大涅槃(等覚を成り大涅槃を証することは)  
必至滅度願成就(必至滅度の願第十一願成就なり)  
如来所以興出世(釈迦如来、世に興出したまふゆゑは)  
唯説弥陀本願海(ただ弥陀の本願海を説かんとなり)

この世で仏になるべき身と定まり、お浄土で悟りをひらくことができるのは、すべてのものを必ず仏に成らせようとする本願が完成したからである。(そのようにお釈迦さまが教えてくださった)。まさしく、お釈迦さまが、この世に生まれたのは、阿弥陀如来の本願を説くためでありました。

お釈迦さま(釈尊)は、苦悩の根源である迷いとその解決方法を明らかにして、仏陀と成りました。三十五歳の時です。そして、八十歳で涅槃(法ニダルマ)の世界へ帰って行かれるまで、インド各地を遊行し教えを説き続けて行かれました。

その釈尊が涅槃に帰ってしまった。残された弟子や信者の嘆きは大変なものであったろうと想像します。今までは、先生である釈尊に相談すれば、その人の能力気質に応じて、巧みな解決方法を教えてくだ

さいました。これからはそれが出来ない。釈尊が残した教えを抛り処として、先生なしで修行しなければなりません。

ところが、先生がいなくて簡単には出来ないわけです。このまま修行しても悟りに到らないまま命が尽きるのではないだろうか。私には不可能かもしれない。何時になったら悟りに到ることができるのか、不安がつきまといまいます。

そういう葛藤のなか、釈尊の教えを整理していく過程の中で、一つは、釈尊はこの世で修行し悟りをひらいたのだけれども、過去に幾度となく生まれ変わり死に変わり修行を重ねてきたからこそ、その結果としてこの度の生で完成することが出来たのだと考えられるようになりました。ある時は、うさぎとして生まれて自らの肉体を火に投じて布施供養を行って亡くなったなど、前生譚としてジャータカ物語に語り伝えられています。

もう一つは、釈尊は法を体得して仏と成った。法とは、時間空間を貫いた真理、「仏、世に出づるも出でざるもかわらざる天地自然の真実である」と云われる。釈尊が作り出したものではありませんから、誰でも法を悟れば仏になる可能性がある。しかし、法は「いろもなし、かたちもなし」といわれるように、法のままでは私たちには分かりません。一方、法は真実なるが故に迷える者を救おうと常にはたらし続

けているはずである。ですから、法の側からいうと人間釈尊をこの娑婆しやばに送り出して、法に背いていることが、私たちの迷いであり苦の根源であると教えてくれたのである。釈尊よりも釈尊をこの世に送り出した普遍的法の方が根源的であるという考えが生まれてきました。

そう言えば、過去には釈尊を含めて七人の仏達が、この娑婆世界に生まれて来ては、迷える人々を救済して法の世界へ帰って行かれた。次に法の世界からこの娑婆世界には、五十六億七千万年後に、弥勒みろくぶつ仏が生まれ出て迷える人々を救ってくださるということが教えとして整理されてきます。

つまり、法を悟ってはじめて仏というのであって、仏よりもその背景にある法に目覚めることが大切であるということなのです。

雑阿含経ぞうあこんぎょうという經典にもこのような話が書かれています。

釈尊の弟子に、ヴァツカリという修行者がいました。年をとり重篤じゅうとくな病氣わづい陥おちったヴァツカリは、死が近いことを予感します。最後に釈尊を礼拝したい。その願いを聞きつけた釈尊がやって来ました。思わず身体を起こし、礼拝しようとしします。その時「ヴァツカリよ、この腐りゆく肉体を見てなんになるうぞ」とおっしゃるんです。私もあなたと同じように腐って死んでいく肉体を持っている。その肉体を拝むことにどんな意味があるのかということでしょう。続いて「仏ぶつを

見るものは法ほうを見る。法を見るものは仏を見る」と云われます。法を悟ってはじめて仏なのであって、法を見ることなくして仏を礼拝してはならないということだと思えます。

### 教えの師と救いの主

釈尊は、仏になる実践方法を教えてくださいました。その通りに来る人はそれでいいわけです。病が軽い方です。ところが私も含めて圧倒的多数は、釈尊と同じように出家し修行生活をおくることができません。

そういう私に、悟りに到る道は閉ざされているのでしょうか。

いやいやそうではないんだ。迷いが深く重篤な病気のあなたのために、すべての人を必ず救うという阿弥陀如来の念仏の道がある。如来の願いが込められた念仏を抛り処に本願を聞きながら日暮らしを送り、必ず浄土で完全な悟りをひらき仏になることができる。そのように阿弥陀如来が仕上げて下さった。何も心配することはない。安心して人生をおくることができる道があると釈尊が教えて下った。阿弥陀如来から直接教えてもらったのではなくて、釈尊の言葉を通して教えてもらったのです。

ですから、仏法に帰依きえするものは、浄土真宗の場合は（裏面に続く

(中面から続く) 釋しやく○○と法名(ほうみょう)を名のり、「教えの師」である釈尊の弟子となります。一方礼拝するのは「救いの主ぬし」である阿彌陀如来ということになります。

法の目的は、すべての人を救うということでしょう。そのことが阿彌陀如来によって成し遂げられる。釈尊がこの世に生まれたのは、まさしくそのことを教えるためであったと親鸞聖人しんらんしやうじんはよろこばれました。



### 釈尊と阿彌陀如来の関係

色も形もない法が、そのままの人格的表現として現れた相すがたが、阿彌陀仏である。その阿彌陀仏が釈尊をこの世界に送り出した。

『久遠実成阿彌陀仏くおんじつじやう 五濁ごじやくの凡愚ぼんぐをあはれみて 釈迦牟尼仏しやくかむにぶつとしてぞ 迦耶城がやじやうには応現おうげんする』と親鸞聖人は讃たたえられています。

釈尊は、阿彌陀如来が重篤じゆうとくの病を抱える凡夫を救うために現れてくださった分身ぶんしんであるとして見られるのです。

以降、釈尊をはじめ諸仏は、阿彌陀の分身であり、弟子である。皆阿彌陀への帰依を勧めるはたらきをされているというように受け取るよ

うになって来ます。

蓮れん如上じよじやうにん人に到ると、『諸仏しよぶつ・菩薩ぼさつと申すことは、それ阿彌陀如来の分身なれば、十方諸仏じつぽうしよぶつのためには本師本仏ほんしほんぶつなるがゆゑに、阿彌陀一仏いちぶつに帰したてまつれば、すなはち諸仏・菩薩に帰するいはれあるがゆゑに、阿彌陀一体のうちに諸仏・菩薩はみなことごとくこもれるなり。』

(御文章ごもんじやう)と述べられるようになります。

このように、阿彌陀一仏に、釈尊も諸仏も一体となつて内に入っているから、浄土真宗の場合は阿彌陀一仏を礼拝の対象としているということです。

ただ、阿彌陀あみたといつても娑婆しやばの方かたではありませんので、具体的姿が分かりません。そこで阿彌陀の分身で一体である釈尊をモデルに木像もくざうや絵像えざうをつくつた。釈尊の像に阿彌陀様と言っているようなものです。この世の名前は釈尊というかもしれないが、法の世界ではそれを阿彌陀ということなのでしょう。

浄土真宗寺院の御本尊には、仏飯が二つあげられています。一つは釈尊に、二つ目は阿彌陀仏にです。(文責住職)

※五濁ごじやく 末世においてあらわれる避けがたい五種の汚れのこと。①劫濁けつじやく 時代の汚れ。②見濁けんじやく 思想の乱れ。③煩惱濁ぼんごうじやく 煩惱が盛んになること。④衆生濁しゆじやうじやく 衆生の資質が低下すること。⑤命濁めいじやく 衆生の寿命が次第に短くなること。迦耶城がやじやう Ⅱ インドのガヤーという町。そこで釈尊が悟りを開き仏となった。応現おうげん Ⅱ 形をとって現れること。